

「誰がテロリストか」

2014年4月15日

聖書は、二つの焦点を持つ楕円形であると言われる。一つは、エジプトの奴隷から解放された「出エジプト」である。もう一つは、罪からの解放をもたらした主イエスの「十字架」である。

イスラエル人にとって「出エジプト」は決定的な出来事であった。彼らは、れんが造りの苦役を負わされ、奴隷の人口爆発を恐れたエジプト王・ファラオによって、生まれた男児はナイル河に投げ込まれる抑制策を取られる。彼らの呻きが神に届き、神はモーセに「出エジプト」の使命を命じる。モーセは、ファラオに三日の道のりのある荒れ野での礼拝を申し出る。ファラオは逃亡の企てを見破る。諸々の奇跡がモーセを通して行われるが、ファラオは底辺労働者のいない国家は立ち行かないので、断固、拒否する。その最後に「過越」と言われる事件が起こる。羊の血が柱と鴨居とに塗られた家はイスラエル人の家で、主は過越す。塗られていない家はエジプト人の家で、主は侵入し、家畜に至るまで、初子（ういご）をことごとく殺害する。たまりかねたファラオは「出エジプト」を承認する。初子殺害が「出エジプト」を可能にしたと記述している。

初子殺害が、歴史的事実だとすると、誰がしたのか。神は昔から今まで、ご自身が手をかけて、人の命を奪うことはなさない。耐え難い苦役と生存まで危うくなったイスラエル人が、秘密結社を作り、テロリズムに走ったと考えざるを得ない。聖書を素直に読む限り、奴隷からの解放はテロリズムであったと受け取れる。

今日、テロは悪の代名詞になっている。相手をテロと呼んで、自分を正当化する機運が見える。確かに、武器を持って戦うことしかできなくなっている人もいる。更に、人を見れば殺害する非情な子どもに仕立て上げる状況もある。戦いに明け暮れた非業さを見せられる。

しかし、圧倒的な力の差があり、差別と抑圧を受けている人々は、テロでしか訴える方法を持たないことも知るべきではないか。石川啄木は「われは知る、テロリストのかなしき、かなしき心を」と歌っている。

国と国との戦争は起こせない時代になってきた。非対称と言われる局地における泥沼の戦いが続くであろう。そこでは、力を持つ者は、相手をテロリストと呼んで、自らを正当化する。その前に、人間の尊厳を否定し命を奪う「テロリストは誰か」を考えてみる必要がある。